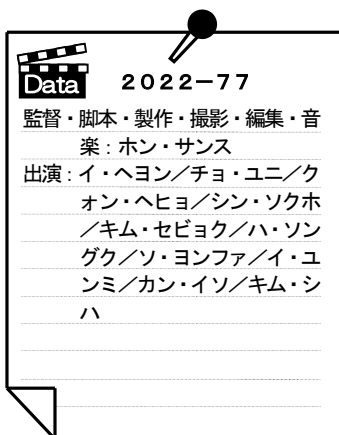




👁️👁️ みどころ

ホン・サンス監督第26作目は往年の大女優、イ・ヘヨンを起用。米国暮らしをしていた元女優サンオクが韓国へ帰国し、妹のマンションへ。積もる話は山ほどあるから、ストーリーは作りやすい。

さまざまな舞台を巡るサンオクの1日を通して、ホン・サンス監督お得意の“会話劇”が進むが、そこで目立つのはサンオクの祈り（独白）。彼女は何のために韓国に戻り、何を神に感謝しているの？

最後の会話の相手は、約束していた某映画監督。そこでは新作映画作りの話題で盛り上がったが、アレレ、一転して意外な結末に・・・？

原題、英題、邦題とも同じ、このタイトルの意味は？それをしっかり考えながら、ホン・サンス流会話劇の出来映えをしっかりと楽しみかつ味わいたい。

■□■第26作目は往年の大女優を起用！彼女の役は？■□■

私の「シネマールム」の出版は2022年7月で50冊目になったが、ここ10年ほどは年間2冊のペースを守っている。それと同じように（？）、コロナによる延期が相次ぐ映画界にあっても製作ペースが衰えず、2021年に『イントロダクション』に次ぐ第26作目たる本作を完成させたのが「うまい、安い、早い」が“売り”のホン・サンス監督。

本作の特徴は、彼の公私にわたるパートナーである女優のキム・ミニを登場させず、彼女をプロダクションマネージャーとし、往年の大女優イ・ヘヨンを起用したこと。それは一体なぜ？私は全然知らなかったが、1962年生まれのイ・ヘヨンは1982年にデビューした後、95年までに26本の映画に出演しているらしい。

本作で85分間ばば出ずっぱりのイ・ヘヨンが演じるのは、アメリカ暮らしをしていた元女優のサンオク。彼女は今韓国に帰国し、長らく疎遠だった妹ジョンオク（チョ・ユニ）

の高層マンションに身を寄せているが、それは一体なぜ？

■□■姉妹のたわいもない会話の中に、なぜか緊張感も！■□■

日本以上に都市問題が深刻な韓国では、高層マンションに住むのは大変。それなのに、なぜジョンオクがあんな高級マンションに住んでいるのか、私にはよくわからない。ところが、川沿いのカフェで朝食後のコーヒーを飲みながら、ジョンオクが「お姉さんもここに住めばいいのに」と、近くで工事中の新築マンションの購入を勧めるシーンを見てびっくり！

もっとも、そんなたわいもない姉妹の会話の中でも、ジョンオクはかつて自分をソウルに残して渡米したサンオクに対する恨み節もこぼしていたが、それと同時に「今回はなんで帰ってきたの？連絡をもらって驚いたわ」と質問したのは当然だ。それに対するサンオクの答えは、「ただ来たの。会いたくて」だったが、それはきっとウソ！そこにはきっと何かの事情があるはずだ。それなのに一体なぜ？しかし、姉のそんな答えに妹がそれ以上突っ込むことができなかったのは仕方ない。本作導入部はそんな姉妹のたわいもない会話の連続だが、その中になぜか緊張感も！

■□■公園内での会話は？トッポギ店での会話は？■□■

そんな導入部での姉妹の会話に続いて、スクリーン上には2人が花々が咲き誇る公園内を散歩中、通りすがった2人の女性に写真撮影をお願いするシークエンスが登場する。ここでは、4人の間で実に自然な会話が行われるが、それって何か意味があるの？私には実はそれがよくわからない。その後、サンオクが昨夜見たという不思議な夢についてジョンオクが尋ねると、それに対するサンオクの答えも「ダメよ。12時を過ぎないと」と教えてもらえなかったからアレレ。

続く会話は、ジョンオクの息子スンウォン（シン・ソクホ）が経営するトッポギ店。アメリカから帰国した機会に店に立ち寄ったのは当然だが、残念ながらスンウォンは留守。しかしその後、店を後にしたサンオクを追ってきたスンウォンとの間で、スンウォンがサンオクのためにずっと保管していたというプレゼントを巡って、何とも温かい会話が開かれるので、それに注目。なるほど、この伯母さんとの甥との関係は極めて良好らしい。

■□■幼い頃に住んだ家では？下手すると住居侵入だが・・・■□■

ホン・サンス監督の会話劇はそれぞれ面白いが、どこで何が出てくるのかはサッパリわからない。本作も前述のような会話劇が続くが、トッポギ店を出たサンオクは今度は1人でタクシーに乗って、ある地に向かい、今はとある家の庭を散策中だが、これは一体どこ？誰の家？その説明はまったくされないが、そこで応じた若い女性との会話を聞いていると、ここはかつてサンオクが住んでいた家らしい。なるほど、なるほど。

アメリカから韓国に戻ってきたサンオクは、約束の地に向かうまでにまだ時間があるので、タクシーに乗って懐かしい昔の家を訪れたわけだが、こんな行為は下手すると住居侵入罪に・・・？弁護士の如くはついそんなことを考えてしまったが、ホン・サンス監督作品

では、今は洒落た店舗に改装されたものの、緑が生い茂る庭の風情は昔のままのこの家で、サンオクと女性店主（ム・セビョク）やその娘との微笑ましい会話劇に注目！

■□■最終目的地の居酒屋では？誰とどんな会話を？■□■

韓国のレジェンド女優イ・ヘヨンをはじめて起用した本作のラストを飾る会話劇では、それにふさわしい“お相手”が必要。そこでホン・サンス監督が白羽の矢を当てたのは、同監督作品常連のクォン・ヘヒョだ。もともと、ここではクォン・ヘヒョよりイ・ヘヨンの方が“格上”だから、仁寺洞にある“小説”という小さな居酒屋での2人の会話は、今は映画監督になっているソン・ジェウオン（クォン・ヘヒョ）が約30年前の学生時代に観たというサンオクが出演した映画と、原作での彼女の演技について熱く語り合うものになる。ソン・ジェウオン監督がサンオクとの面会を望んだのは、彼女と一緒に映画を作りたいからだった。そんな要請に対して、サンオクが「どれくらいの期間を要するの？」と質問したのは当然だが、それに対するジェウオン監督の回答は「約3カ月で脚本を仕上げる」というものだったから、それならスケジュールを含め十分応じられるのでは？

そう思っていると、意外にもその答えは「ごめんなさい・・・できません。私には時間がありません。」だったから、アレレ・・・。それは一体なぜ？「私には時間がない」とは一体何を意味するの？

■□■タイトルの意味は？■□■

儒教の国であるはずの韓国にキリスト教徒が多いのは意外だが、本作では冒頭から1人で神に祈りを捧げるサンオクのシーンを映し出すことによって、それを明確にしていく。サンオクの祈りのシーンは再三登場するが、その内容は、今日生きていることを、そして、今日の糧を感謝する前向きなものばかりだから、ノープロブレム。しかし、ホン・サンス監督はなぜサンオクの1日を映し出す本作の1つ1つの会話劇の中に、それぞれ祈りのシーンを入れているの？

女は美人なほど得なことは言うまでもないが、そこには生まれた時からの宿命がある。それに対して、男は顔より力、顔よりカネ、とも言われるが、同時に中年になれば、男は自分の顔に責任を持たなければならない。しかして、本作は原題も英題も、そして邦題も「あなたの顔の前に」だが、その意味は？わかったようなわからないようなこのタイトルの意味は、サンオクの祈りの言葉の中からちらほら推察できるが、基本的にはよくわからない。本作のクライマックスになる居酒屋でのサンオクと監督との会話劇は、新作映画の制作を巡って盛り上がってくるのと同時に、焼酎の量も進んでいくが、そんな中、サンオクの口から「私と寝たい？」という露骨な言葉も飛び出すから、アレレ・・・。その後の展開や如何に？

そう思っている中で静かに始まるサンオクの告白とは・・・？なるほど、ホン・サンス監督の演出は面白い。ホン・サンス監督の会話劇は面白い！

2022（令和4）年7月13日記